INFORMATION

COMMONS FESTA コモンズフェスタ2001 11月4日からスタート!!

「ART OF LIFE ～「生き方」新・呼吸～」

寺町倶楽部では毎年秋の恒例事業として、11月4日～11日、「コモンズフェスタ2001～ART OF LIFE」を開催します。

このフェスタは、應典院を舞台に、地域コミュニティの再構築を願って開催している、多様なNPO（民間非営利組織）とアーティストが相互にかかわりあう協働の場。4回目を数える今回は、アーツ・コラボレーション・プロジェクトを新設。コモンズに参加するNPOスタッフ、大学生、ボランティアとアーティストがコラボレーション（協働作業）を体験しながら、表現のモチベーションを高めます。また、昨年に続いてのモニターボランティアや大学とのコラボレーション企画の公開ゼミなど、新たな取り組みも目白押し。

もちろん参加団体の催しも多種多様。詩人・上田假奈代さんとパフォーマー・デカルコマリーさんによるパフォーマンスがオープニングを飾ります。その他、昨年好評だった臨床哲学Cafe&Barを始め、お馴染みの団体が連日催しを開催します。そして締めくくりには、「日本人の死に方Part3」が開催されます。

さまざまな出会いから、誰もが自由にいまを問い直し、つながり合っていく……そんなきっかけに、きっとなるはず。みなさんのご参加をお待ちしています。

いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

毎月第3木曜に開催しています。どなたでも参加できます。ぜひあなたもいらしてください。

第12回 9月20日（木）
「掃除と炊き出しこそ、わが人生」

話題提供者
綜合開発代表取締役　樋口順三さん

◎時　間：18：30～
◎参加費：500円
◎会　場：應典院

お申し込みは事務局まで。

【新入会員ご紹介】

（2001年8月2日まで）

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
山崎　浩司　大阪市城東区

第29回寺子屋トーク
ベストセラー「がんばらない」の鎌田實さんらと語り合う

第29回の寺子屋トークには、いまベストセラーの「がんばらない」の著者である、諏訪中央病院管理者・鎌田實さんをお招きします。

「がんばらない」は、鎌田さんが地域医療を通して、死と向き合う人々やその家族との交流を描く感動のエッセイです（今秋にはTBSでドラマ放映の予定）。

いま私たちは人類史上初めて「余命何ヶ月」という刃を突きつけられる、きびしい時代を生きています。死を受け入れることの意味。それは、当事者、家族、そして医療や看護に当たる人々が、“自己決定”の意味を問い直し、新たな“生”の価値観をとらえ直すことでしょう。

また同時に、その決定権は患者自身のものであり、当事者の選択こそが優先されなくてはなりません。

鎌田さんの講演の後、ささえあい医療人権センターCOMLの辻本好子さん、日本吃音臨床研究会代表の伊藤伸二さんといっしょに、医療や福祉、あるいは生き方そのものの自己決定についても話し合います。

●

○日　時
10月8日（祝・月）
13：00～16：00（予定）

○参加費
会員1000円
（一般1500円）

サリュ VOL. 27
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2001年8月5日
（偶数月発行）
編集人　池野亮、大塚郁子
川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

2001 AUGUST
vol.27



国宝や重要文化財の仏像などを修理する「彫刻の病院」。何百年もの年月を経た彫刻をなおすためには、修復技術者の修行の積み重ねと伝統の継承がある。ノミや彫刻刀を片手に進める仏像などの修復には、独自の技術力、そして判断力が求められる。現在は伝統技を磨くことに加え、新たな素材などの知識を広げ、使いこなすことも求められている。伝統と最新技術の融合。伝統技に誇りを持ちながらも最新技術を取り入れることをいとわない、その柔軟性としなやかさが日本のひとつの美を支えている。

EVENT REPORT

植島啓司さんVS鷲田清一さんの白熱トーク、「自分をほどく哲学クリニック」が大盛況!!

～第28回寺子屋トークレポート

第28回寺子屋トークは「生き方のお手本?～自分をほどく哲学クリニック」と題する対談企画。「宗教は、人間がいちばん熱くなることと、いちばん冷たくなることを扱う」という宗教学者の関西大学教授・植島啓司さんと、「人生にとってなくてはならないものについて、人の話に素直に耳を傾けながら考える」臨床哲学を提唱する大阪大学教授・鷲田清一さんのお二人をゲストに、6月16日に開催しました。

今回は、参加された方の声をできるだけ反映しようと、「問診票」と「質問票」を事前にお配りし、それをもとに対談をすすめていただきました。寄せられた思いを的確にとらえたお二人のお話は、生き方への多くの示唆を与えるものとなりました。参加者143名。（文：大塚郁子）

人との関係をゆるい輪のなかに

質問の内容の多くは、家族や恋愛、職場や学校での人間関係など、人との関わりについてでした。人と人とのつながりが希薄になりつつある現代社会の中で、誰もが人間関係についての悩みを抱えているのでしょう。

「人は、ある特定の他人との親密な関係を、生きる上でのベースにしている」と鷲田さん。その親密な関係を、家族だけにもつ人が多いが、いかに家族以外の人と親密さを築くことができるのかが課題だと、指摘されました。

植島さんは「いかにして人間関係をゆるい輪の中にもっていくかを考えないと」といいます。どんなにいい関係でも、閉ざされた状況ではその関係は悪くなるのが必然、閉塞した家族関係や決まった相手とだけつきあうような人間関係は一度とりこわし、作り変える必要を説かれました。

親密な関係はたいせつです。しかしそれに執着するあまり、悩み、傷つき、関係自体がゆらいでしまうこともあります。多くの人と出会い、ふれあい、そして新たな関係を築くことが、自分自身、そして社会の再生へとつながるのではないでしょうか。



生きることは「負け」の連続

お二人のように良い年の取り方をするには? というユニークな質問もありました。それに対し植島さんは「"負け"とうまくつきあうこと。生きるというのは負けの連続。人間は負けたことは忘れて、勝ち取ったものだけを頼りに生きていこうとしている」とおっしゃいます。そこに、資本主義社会の問題点が見えるような気がします。

今回企画を進める過程でも、多くの困難や失敗がありました。そこから多くの学びや気づきがあったことを思いだし、植島さんのことばが心に響きました。

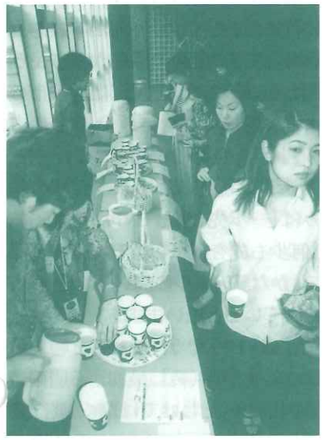
鷲田さんは「人が怪我をしないための保全装置が多すぎる」と指摘します。小学校では、"公平"という名のもとに、運動会で順位をつけないところが増えていると聞きます。傷つかないように、失敗しないようにという「配慮」が、逆に成長のための貴重な経験の機会を奪っているとはいえないでしょうか。

多くの"負け"の中から得られたもの、それが"いま生きている私"をつくっているのだと思います。

生き方の処方箋は?

個人のゆらぎは社会のゆらぎが原因ではないか、と話題は展開しました。人間関係や個人の生き方の悩み、それは依って立つことのできない社会への不安のあらわれであり、社会全体の目的や明確な価値観が見失われたからでしょう。

「いまの社会のルールは普遍的なものではなく、場所が変り、時代が変ればまったく違ったものになるということを認識するべきだ」と植島さん。そして、鷲田さんは「あるひとつの社会が作っている価値観とか、意味づけに対して、それとは別にもうひとつの見方があるんだ、というのを伝えてゆく装置がなくなってきた。だから、やり直しがきかないとか、いまの社会のルールに自分を合わせなくてはという意識が強くなっている」。



日本では、個よりも全体が優先される風潮があります。社会全体の価値観の中で、そこから脱落すれば、這い上がることさえままならないというふうに感じがちです。

「自分たちにとって大切なことは『理想社会』というのがどういうものなのかイメージし、明確なビジョンをもつことだ」と植島さんはいいます。そして、「不安に対する処方箋は、最悪の事態を想定してそれに対処する方法を考えるしかないんではないか」と語ります。要は、社会に依って立つのではなく、私たちが自立し、各々の価値観を認め合いながら家族、地域、そして社会を形成することではないでしょうか。



●

自分の立つ位置を確認して、まわりを見渡してみるとさまざまな生き方をしている人に触れることができます。自分のこだわりを捨てることで、相手を認め、他人の生き方を尊重することにつながります。他人とまみれながら、多様な生き方を許容していくなかには、理解できなかったり、わからないことに直面したりすることは多いでしょう。そのわからないものに、わからないままにつきあっていくということも、とても大切な経験のように思います。

誰にでもあてはまる明確な「生き方のお手本」などはないのかもしれません。けれど、一人ひとりが何を必要とし、何が幸せのカタチであるのか、忙しい毎日のなかでもきっちり自分に問いかけ向き合うことが、とても大切なことなのだと感じました。

Staff Report　舞台裏で経験した「気づきと学び」

インターン　辻　牧子（立命館大学4回生）

「生き方のお手本?」はインターンとして寺町倶楽部で勉強させてもらうようになってから始めての、大きな催しものでした。

私の役目は、受付と休憩時間用のお茶の販売。朝から販売用の本格派チャイを作りつつ、参加者を迎える準備に大忙しです。

まだまだおぼつかないインターンの私たちをサポートしてくださり、また今回、私にもっともさまざまなことを気づかさせてくれたのも、ボランティアの方々でした。

たとえば、受付を行うにしても、訪れる方一人ひとりに対して、ていねいで、あたたかさに満ちた応対をされていました。また、お茶の呼び込みでは売り込みすぎず、黙りこくりすぎずの絶妙な対応はとてもさわやかで、そのためか、お茶を買われる方の多くがボランティアの方に声をかけられていました。

今回の寺子屋トークでは、受付や物販場所は来場された方々と主催者側が直にコミュニケーションをとれる唯一の場でした。そこで主催者側の意図を理解し、明るく対応してくださったことは、講演の内容と同じぐらい訪れたみなさんの満足度に、大きく影響したことと思います。ついつい段取りにばかりに目を向けがちであった私にとって、これは大きな発見でした。

終了後、ボランティアのみなさんを交えての打ち上げでは、これから寺町倶楽部にどう関わっていきたいのかという率直な意見も聞くことができました。

このように、鷲田さんや植島さんの話しを聞いて考えを深められた方々の裏側で、私自身も運営に関わることで寺町倶楽部の「気づき・学び」を体感させていただいたのです。

SPECIAL DISCUSSION

市民と行政の協働を考える

～「市民参画」に必要なものは?～

「市民参画型施設」という言葉をご存じですか? 「参画」とは「(政策や事業などの)計画に加わること」と辞書にあります。最近の行政の動きを見ても、市民参画を積極的に進め、協働で事業を行おうとする意欲が感じられます。

應典院寺町倶楽部の活動においても、行政とのパートナーシップがよりいっそう求められており、そのために「行政との協働を進めていく上で必要なもの＝市民の能力」について考えてみようと、対談を実施しました。

ご出席いただいたのは、堀江洋さん(キッズプラザ大阪)と藤本隆さん(大阪市広報課)。司会を寺町倶楽部運営委員・蔦田夏さん(関西こども文化協会副理事長)にお願いしました。

インタープリターの参画

――まず、堀江さんのお仕事について聞かせてください。

堀江●キッズプラザ大阪は1997年にオープンした「こどものための博物館」で、子どもたちの感性を豊かに育む機会の提供をめざしています。他の博物館と大きく違うのは「ハンズオン」という学習法を取り入れていることで、展示物に直接ふれるのはもちろん、基本的に何をしてもOK、民族衣装の場合だと実際に着替えてもらったりしています。メンテナンスが大変ですがね(笑)。私自身は企画課に所属し、フロアーの運営やイベントの企画・運営にあたっていますが、子どもが自ら行動し、楽しめることを第一に心がけています。

――運営はすべて職員の方がされてるんですか?

堀江●いえ、うちには「インタープリター」と呼ばれる施設ボランティアの方々がいらっしゃって、現時点での登録者数は342人です。

――多いですね。

堀江●ええ、毎年公募して、ほとんど全員を受け入れているので徐々に増えていってます。ただ、登録者数だけで「市民参加が進んでいる」とは言えないと思いますし、今年度から「市民参画」を意識した仕組みを作ろうと、企画課の中に「リソースセンター事務局」を設置しました。つまり、インタープリターの担当者を明確に位置づけたわけです。そうでもしないと日常業務に追われてしまい、市民との関わりをじっくり考えることはできませんからね。インタープリターの方々も、意見やアイデアを伝えるシステムがはっきりしたからか、より積極的に活動されるようになりました。



――なるほど。お互いが活発に意見交換するには、窓口システムを明確にすることが必要なんですね。そういう施設はキッズプラザ以外にもあるのか、藤本さんご存じですか?

藤本●残念ながら、大阪市ではあまりないようですね。ずいぶん前から「市民参加」と言われてますが、現実にはまだまだでしょう。何か事業を行う場合でも、企画の段階から市民が関わることはまれで、とくに大阪市のような規模の大きい政令指定都市の場合、むずかしいですね。

そういう意味でキッズプラザの試みは「一歩先」なんてものではなく、「何歩も先を行っている」という感じで、かなりレベルの高いものを追求されていると思います。

堀江●いや、そう言われると恥ずかしいですがね(笑)。最初から明確に意図していたわけではなく、試行錯誤しながらやってきた結果に過ぎず、絵本の読み聞かせや他施設の見学など、インタープリターの方々の自主的な活動をしっかり位置づけるようになったのは、今年になってからです。主催事業を一緒に企画するようになるには、まだしばらく時間がかかるでしょう。

「市民参画」に必要な能力

――藤本さんは先ほど、規模の問題だと言われましたが、具体的にどのようなことですか?

藤本●いくつかの理由はありますが、私がいちばん感じているのは、歴史のある大都市ほど「近代化」が究極まで進み、「公共」を行政が担いすぎているのではないかということなんです。公共とは本来、行政と市民が半々で担うべきものなのに、市民の側に「サービスの受け手である」という意識が強くなってしまっていると感じます。

行政が実施する講座も、その目的はあくまで市民が抱えている問題解決のためであって、受講して終わりではなく、自分たちでグループを作って継続的に学習したり、主体的に行動を起こしたり、という動きにつながっていってほしいんです。

行政は市民が動きはじめるのを支援することが基本で、それはけっして責任放棄やサービスの水準を下げるという意味ではありません。主役は市民だということを忘れてはいけないと思いますね。

堀江●たしかにそうなんですが、本音の部分では、年間の事業をこなすのに精一杯という感じです。企画の段階から市民と一緒に考えることに取り組む職員もいますが、ものすごい労力が必要ですし、そういう準備段階のことは仕事として認められないという現状もあります。

藤本●以前いた施設で、「企画を一緒にしませんか」と呼びかけたら、40～50人集まったのはよかったんです



が、大変な思いをしたことがあります(笑)。ほとんどの方が自分たちで話し合うことに慣れておらず、反対意見が出ると感情的になられるので困りました。

――議論ができないというのは大問題ですね。そういう訓練も必要なんでしょうが、キッズプラザではどうされてるんですか?

堀江●まず、インタープリターが身につけるエプロンや、研修会の講師など、自分たちに関わりのあることを相談して決めてもらうように考えています。インタープリターの中には会議の経験が豊富な方もいらっしゃるので、その人のされることを見聞きしたり、会議に参加する経験を積み重ねたりすることが、自然と訓練になっているのではないでしょうか。それに、自分がその場にいて、物事の決定に関わったという実感をもてば、責任感も生まれ、その後の活動が大きく変わってきますよ。

「最初の第一歩」を支援する

――お話を聞いていると、上から与えられたことをこなすのではなく、お互いに刺激し合って能動性が引き出されていくという印象を受けますね。従来の講座のような、一方的に講師の話を聞くというスタイルが、受け身の姿勢から抜けきれない原因になっているんでしょうか。

藤本●必ずしも講座が悪いのではなく、受講者の意識の問題もありますね。講座終了後、自分で行動を起こす人も実際にはいますし。行政としては、市民参画に結びつくような能動性を引き出したり、最初の第一歩を踏み出したりするような市民との関わりが、今後ますます求められるでしょうし、そちらの方に意識してシフトしていくべきでしょう。キッズプラザはすでにそうなっているようですが。

――参加を促しながら自主性を引き出す、そういう場作りが必要だということですね。それは行政だけでなく、ボランティアと関わるNPOにとっても必要なことですよね。

堀江●ただ、いかに市民から自主性を引き出すかというように、市民にばかり変化を求めるのでなく、実際は私たち行政の側にとっても多いに学ぶべきものはありますよ。

本音を言えば、インタープリターは私たちにとって「いちばんキツイ市民」なんです。内部のこともすべてわかってますから、言い訳なんてできません。でも、そういう人たちから率直な批判もいただきながら、協働していけるかどうか。来館者の意見や要望を代弁してくれてるのがインタープリターだと思うので、きちんと意見を受けとめながら、一緒に物事を決めていけるような場にしていきたいですね。

藤本●いま堀江さんがおっしゃったような「市民参画型施設を作ること」は社会教育主事の仕事の一つです



堀江　洋さん(キッズプラザ大阪　企画課・企画係長)

①最近、読んで感動した本、または映画:まだ見ていませんが、「ホタル」を見たい。

②好きな食べ物:活魚。今年の3月までビールでしたが、強烈な通風が出て、いまドクターストップ中。





藤本　隆さん（大阪市市長室　秘書部・広報課主査）。
①最近、感動したこと：「われわれの神奈川を考える会」の政策提言（http://www.geocities.co.jp/WallStreet-Bull/7382/）このホームページを見て、こんなに市民活動やNPOについてまじめに考えていた研究会があることを知り、その熱意と議論のレベルには感激しました。
②好きな食べ物：イタリア料理、そば、そして最近は懐かしの「揚げパン」

が、もう一つの仕事としては、「市民が社会に参画していくための学びの支援」があげられます。

生涯学習・社会教育行政の役割は社会参画への入り口というか、「広く浅い」プログラム中心にしかできないので、市民が「もっと深く知りたい」と思ったときには専門性をもったNPOにつないでいくような、コーディネーターの役割も併せ持つ必要があると思いますね。全体を見ながら柔軟に、という感じでしょうか。

――そういう意味では應典院寺町倶楽部も、特定の分野に特化せず、新しい市民活動を生み出す孵卵器のような役割を担うなら、場の提供だけでなく、何か新しいものを生み出すためのつながりを強化する工夫も必要でしょうね。

藤本●サロンやグループ連絡会のように、横のつながりを意識して作ってみてはどうですか？　施設運営にも参画できるシステムを作ってもいいでしょうし。

堀江●そうですね。同じ場所を利用しているんだから、いろいろ感じたり気づいたりしていることがあるはずで、そこから意見を出してもらえば、「自分たちが守り育てている場だ」という意識が生まれるでしょう。

藤本●それがさらに発展すれば、自分自身がコモンズの担い手であるという意識や、市民の一人として責任を負っていこうという主体性も生まれますよね。

「公益」を担うのは誰か

――NPOの活動の目的は「公益のため」だと言われますが、「公益」という言葉ほど抽象的であいまいなものはないと思うんですね。お二人はどういうふうに定義されますか？

藤本●まず、「“公”とは誰か」という問題があるでしょう。いまはほとんどの人が「公＝行政ではない」と考えていると思いますが、その意味をどれだけみんなが理解しているかは疑問です。なぜなら、コモンズ（共益）を背負う責任や覚悟があってはじめて、その意味は見えてくると思うからなんですが。

教育のことでいえば、最近は大変な事件が起こってますけど、テレビのニュースで街頭インタビューなどを見ると、学校だけを責めるのではなく、「自分は何ができるか」と考えている人が増えてきてますよね。そういうふうに自分の問題として考え、自分の利益だけでなく自らの責任を担おうとすることで、具体的な「公益」が見えてくるのではないでしょうか。そして、公益は自分につながっていると思えば、社会に対するアクションも当然起こるでしょうし、そこから本当の「市民参画」がはじまっていくんだと思います。

堀江●私は、子どもたちの将来に向かって活動することが、「公益」だと考えています。たとえば、「キッズプラザの入館料は高い」とよく言われるんですが、実際の経営はけっして楽ではありません。にもかかわらず、こういった経営形態をなぜとっているのかといえば、日本に「チルドレン・ミュージアム」を根づかせるためなんです。今後、「無料のチルドレン・ミュージアム」が広がるとは思いません。

入館料を設定することによって「行政はなんでもタダ」という意識が変われば、受け身ではない、批判能力をもった市民を育てることになるでしょう。そして、お金に見合うだけのサービスは提供されているのか、設備や機能は充分かなどを評価してもらって改善したり、施設の数を増やしたりすることが未来への投資であり、次世代の子どもたちへお金を回すことにもなると思います。

未来の子どもたちにどんな社会を残せるのか、それはチルドレン・ミュージアムだけにかぎらず、あらゆる分野でいろいろな人が考えるべき課題でしょうし、現状に満足せず新しい状況を切り拓くための試行錯誤と挑戦が必要でしょう。

――「未来の日本のための投資」は行政だけの課題ではなく、私たち市民一人ひとりが考えるべきことですね。今日はどうもありがとうございました。

～対談を終えて～

蔦田　夏



参画型を追求しないかぎり、市民が主体となった社会は構築できないと思いました。市民が参画するためのシステムを整える必要があるでしょう。しかし、システムが整い、行政との協働の道が拓けたとき、問われるのは市民力です。この「市民力」を、誰が、どうのように構築していくのか、その役割を果たすのが應典院なのかも知れません。

秋田住職発　應典院掲示板

暑中お見舞い申し上げます。
―夏草は心のままにしげりけり
　われいおりせんこれの庵に―
（良寛）

■ホスピスケアのワークショップ

去る6月30日と7月1日両日、グランキューブ大阪で「日本ホスピス・在宅ケア研究集会」が開催、全国から4千人の医療者、看護者、介護者らが集まり盛会でした。

初日の宗教部会では「あなたらしいエンディングをどうサポートするか」と題したワークショップを実施、病院法話の活動を続ける、友人の僧侶・宮本直樹さん、大崎信久さんの実践発表をはじめ、私がファシリテーターを務めました。80人の参加者の中には、医師や看護婦、カウンセラーなど、人と人の深いコミュニケーションにかかわる人が多く、熱心な話し合いが進みました。

スピリチュアルケア（宗教的ケア）の重要性がいわれるいま、互いが胸襟を開いて語り合った、有意義な2時間半でした。

■市大橋爪ゼミでアジア仏教を語る

おかげさまで、最近は月2～3ペースで講演やシンポジウムに声をかけていただいていますが、去る6月28日、應典院プロジェクトの生みの親でもある、大阪市大の橋爪紳也助教授にお招きいただき、大学院のゼミで一コマお話をさせていただきました。

講座は「アジア比較都市文化研究」というもので、私の場合、70年代から始まったアジアの仏教の社会化運動から現在の應典院に話を展開させるというもの。留学生を含む若い大学院生8名となぜかオブザーブに来た友人の松尾カニタさんもいて、結構緊張の講義となりました。

■アーツメッセ2001に参加

昨年に引き続き、舞台芸術の見本市アーツメッセが7月31日、8月1日グランキューブ大阪で開催、應典院もホール部門として参加します。

関西を中心に演劇、音楽、ダンス、伝統芸能などの展示ブースが150、ショーケースが70勢ぞろい、ファンや関係者でにぎわいます。来年度から始まる小中学校での総合的な学習に向けて、表現活動，芸術活動の今後を考えるセッションなどもあります。

ご来場の際には、ぜひ應典院ブースものぞいてくださいね。

Make up Community　コミュニティな人々

ゲスト：松本茂章さん

新聞記者時代を経て、日本アートマネジメント学会・関西部会（JAM－WEST）の事務局長を務める松本さん。現在は、大阪ビジネスパーク（以下、OBPと略）を舞台に「アートとビジネス街の出会い」をめざしてアートプロジェクトを企画するなど、いろいろユニークな取り組みをされています。

“新聞記者”と“アート・マネージャー”、この2つにいったいどんな接点があるのか？　と思い、お話を伺いました。



1981年に読売新聞社に入社して以来、地方支局や大阪社会部で、いろいろな記事を書いてきました。和歌山の毒物カレー事件も、半年近く出張して取材陣に加わりました。地方支局のデスクになったのが39歳のとき。原稿の受け手となってからは、書いて表現したい自分との間でジレンマが生じ、「このままでいいのか」と悩む日々でした。

学生時代からバンドでベースを弾いていたうえ、芝居にも美術にもひかれていました。芸術団体を支援する仕掛けづくりや資金調達に走り回った経験もあり、「文化事業を担当することで再出発したい」と思い至り、手を挙げていたところ、昨年12月、大阪ビジネスパークにある、ホールやシアターを運営する関連会社へ出向しました。

日本アートマネジメント学会への入会は、悩んでいた新聞社時代、小暮宣雄さん（関西部会長）（京都橘女子大学助教授・文化政策論）に誘われたのがきっかけ。小暮さんとは、地方支局の駆け出し記者だった約20年前に出会い、その後も交流してきました。

アートマネージャーの仕事は、「アートと社会を結ぶこと」と思っています。資金調達やコーディネートする作業以上に、「社会におけるアートの存在意義」の説明責任（アカウンタビリティ）を言葉や文章で果たすことが最も大切だと考えるようになりました。一般の方には理解されにくい面がある作品の意義や社会性を、そしゃくして、鑑賞者や支援側にどう橋渡ししていくか……。その視点を踏まえた芸術鑑賞記録を、現在、雑誌に書かせていただいています。

アートを取り巻く日本の状況を見つめ直す行為は、「この国のカタチ」を考えること。アートへの敬意は、一人ひとりの個性を大切にする社会の実現につながるはず、と信じています。今はOBPのようなビジネス街で、いかにアートと企業社会の接点を増やすかが課題です。その取り組みをしていくうえで、應典院の試みはとても参考になります。これからも、切磋琢磨していけるようなお付き合いをしたいと願っています。